

しょうねん　　な　　し　　わたし　かり　　な
この少年は、名を知られなかった。私は仮にケーと名づけておきます。

　　せい　　りよう　　ひ　　かれ　　ふ　し　ぎ　　まち　　ねむ　　まち　　な
　　み　　かつき　　おと　　き　　しん　　まち　　たてもの
ケーがこの世界を旅行したことがありました。ある日、彼は不思議な町にきました。この町は「眠い町」という名がついておりました。見ると、なんとなく活気がない。また音ひとつ聞こえてこない寂然とした町であります。また建物とっては、いずれも古びていて、壊れたところも修繕するではなく、煙ひとつ上がついているのが見えません。それは工場などがひとつもないからでありました。

　　まち　　へいち　　うえ　　よこ　　まち　　ねむ　　まち
町はだらだらとして、平地の上に横たわっているばかりであります。しかるに、どうしてこの町を「眠い町」というかといひますと、だれでもこの町を通ったものは、不思議なことには、しぜんと体が疲れてきて眠くなるからでありました。それで日いくにん　　まち　　とお　　たびびと　　まち　　きゆう　　からだ　　つか　　おぼ　　ねむ　　まち　　こ
に幾人となくこの町を通る旅人が、みなこの町にきかかると、急に体に疲れを覚えて眠くなりますので、町はずれの木かげの下や、もしくは町の中にある石の上に腰を下ろして、しばらく休もうといたしまするうちに、まるで深い深い穴の中にでも引きこ　　ねむ　　し　　し　　ねむ
込まれるように眠くなって、つい知らず知らず眠ってしまいます。

　　め　　じぶん　　ひ　　く　　おどろ　　お　　あ　　みち　　いそ
ようやく目がさめた時分には、もういつしか日が暮れかかっているので、驚いて起ち上がって道を急ぐのでありました。このはなし　　つた　　ひろ　　たび　　ひとびと　　まち　　とお　　まち　　とお
話がだれからだれに伝わるとなく広がって、旅する人々はこの町を通ることをおそれました。そして、わざわざこの町を通ることを避けて、ほかのほうを遠まわりをしてゆくものもありました。

　　ひとびと　　ねむ　　まち　　み　　ひと　　おそ　　まち　　おれ
ケーは、人々のおそれるこの「眠い町」が見たかったのです。人の恐ろしがる町へいってみたいものだ。己ばかりはけっしてねむ　　がまん　　ねむ　　こころ　　き　　こうきしん　　さそ　　ねむ　　まち　　ほう　　さ　　ある
眠くなつたとて、我慢をして眠りはしないと心に決めて、好奇心の誘うままに、その「眠い町」の方を指して歩いてきました。

　　まち　　ひとびと　　き　　み　　わる　　まち　　しん　　おと　　き　　しん
なるほどこの町にきてみると、それは人々のいったように気味の悪い町でありました。音ひとつ聞こえるではなく、寂然としひるま　　よる　　けむり　　あ　　み　　いえ　　と
て昼間も夜のようにありました。また煙ひとつ上がついているではなく、なにひとつ見るようなものはありません。どの家も戸を閉めきっています。まるで町全体が、ちょうど死んだもののように静かでありました。

　　こわ　　きいろ　　つち　　ある　　やぶ　　と　　なか　　いえ
ケーは壊れかかった黄色な土のへいについて歩いたり、破れた戸のすきまから中のようなすをのぞいたりしました。けれど、家なか　　ひと　　す　　す　　しず　　いぬ
の中には人が住んでいるのか、それともだれも住んでいないのかわからないほど静かでありました。たまたまやせた犬が、どこからきたものか、ひよろひよろとした歩みつきで町の中をうろついているのを見ました。ケーは、この犬はきっと旅人が連れてきた犬であろう、それがこの町の中で主人を見失って、こうしてうろついているのであらうと思いました。ケーはこうして、このまち　　なか　　たんけん　　からだ　　つか
の町の中を探検していますうちに、いつともなしに体が疲れてきました。

　　つか　　ねむ　　ねむ　　がまん
「ははあ、なんだか疲れて、眠くなってきたぞ。ここで眠っちゃならない。我慢をしていなくちゃならない。」

　　ひと　　こと　　じぶん　　き　　はげ
と、ケーは独り言をして、自分で気を励ましました。

　　ますいやく　　からだ
けれど、それは、ちょうど麻酔薬をかがされたときのように、体がだんだんしびれてきました。そして、もうすこしでもこう　　ねむ　　がまん　　へん　　たお
していることができなくなったほど、眠くなってきましたので、ケーはついに我慢がしきれなくなって、そこのへいの辺に倒れたまま、前後も忘れて高いいびきをかいて寝入ってしまいました。

　　ねむ　　おも　　じぶん　　ゆ　　お　　おどろ　　め　　お　　あ
よく眠ったと思いますと、だれか自分を揺り起こしているようでありましたから、ケーは驚いて目をみはって起き上がります　　ひ　　く　　あたり　　あお　　つき　　ひかり　　ひ　　いろど
と、いつのまにやら日はまったく暮れていて、四辺には青い月の光が冷ややかに彩っていました。

　　なんじ　　ねむ　　がまん　　ねむ
「もう何時ごろだろう、これはしまったことをしてしまった。いくら眠くても、我慢をして眠るのではなかったが。」

　　おお　　こうかい
と、ケーは大いに後悔しました。けれども、もはやしかたがありません。

　　かれ　　お　　じぶん　　ぼうし　　ひろ　　あ
彼は、そこに落ちていた自分の帽子を拾い上げて、それをかぶりしました。

　　あたり　　み　　じぶん　　ひとり　　おお　　ふくろ　　た
そして四辺を見まわしますと、すぐ自分のそばに一人のじいさんが、大きな袋をかついで立っていました。

　　み　　じぶん　　ゆ　　お　　おも　　かんが
ケーは、このじいさんを見ると、だれか自分を揺り起こしたように思ったが、このじいさんであつたかと考えましたから、かれ　　おく　　いろ　　ほう　　ある　　ちか　　つき　　ひかり　　すがた　　みまも　　やぶ　　ようふく　　き
彼は臆する色なく、そのじいさんの方に歩いて近づきました。月の光で、よくそのじいさんの姿を見守ると、破れた洋服を着

ふる とし しろ の
て、古くなったぼろぐつをはいていました。もうだいぶの年とみえて、白いひげが伸びていました。

「あなたはだれですか。」

しょうねん こえ ちから い と
と、少年は声に力を入れて問いました。

するとじいさんは、とぼとぼとした歩きつきをして、ケーの方に寄ってきて、
わたし お わたし たの わたし ねむ まち た わたし まち ぬし
「私だ、おまえを起こしたのは！私はおまえに頼みがある。じつは私がこの眠い町を建てたのだ。私はこの町の主である。
み わたし とし と たの わたし たの き
けれど、おまえも見るように、私はもうだいぶ年を取っている。それで、おまえに頼みがあるのだが、ひとつ私の頼みを聞いてくれぬか。」

しょうねん はなし
と、そのじいさんは、この少年に話しかけました。

たの だんし き
ケーは、こういってじいさんから頼まれれば、男子として聞いてやらぬわけにはゆきません。
ぼく ちから

「僕の力でできることなら、なんでもしてあげよう。」

ちか しょうねん ことば き よろこ
ケーは、このじいさんに誓いました。じいさんは、この少年の言葉を聞いて、ひじょうに喜びました。

わたし あんしん はなし わたし せかい むかし す にんげん
「やっと私は安心した。そんならおまえに話すでしょう。私は、この世界に昔から住んでいた人間である。けれど、どこか
あたら にんげん わたし りょうど うば わたし も とち うえ てつどう し きせん はし
らから新しい人間がやってきて、私の領土をみんな奪ってしまった。そして私の持っていた土地の上に鉄道を敷いたり汽船を走
でんしん
らせたり、電信をかけたりしている。こうしてゆくと、いつかこの地球の上は、一本の木も一つの花も見られなくなってしまう
わたし むかし うつく やま しんりん はな さ のはら あい にんげん やすみ つか
だろう。私は昔から美しいこの山や、森林や、花の咲く野原を愛する。いまの人間はすこしの休息もなく、疲れということも
かん ちきゆう うえ さばく わたし ひろう さばく ふくろ ひろう すな も
感じなかったら、またたくまにこの地球の上は砂漠となってしまうのだ。私は疲労の砂漠から、袋にその疲労の砂を持ってき
わたし せなか ふくろ すな うえ ふ
た。私は背中にその袋をしょっている。この砂をすこしばかり、どんなものの上にもでも振りかけたなら、そのものは、すぐに
くさ つか ふくろ なか すな わ せかい ある
腐れ、さび、もしくは疲れてしまう。で、おまえにこの袋の中の砂を分けてやるから、これからこの世界を歩くところは、どこ
すな
にでもすこしずつ、この砂をまいていってほしい。」

たの
と、じいさんは、ケーに頼んだのでありました。

しょうねん ふ し ぎ たの う ふくろ も ちきゆう うえ ある ひ かれ やま なか
少年は、じいさんから、不思議な頼みを受けて、袋を持って、この地球の上を歩きました。ある日、彼はアルプス山の中を
ある けしき いく ひと どかた こうふ い むかし たいぼく
歩いていますと、いうにいわれぬいい景色のところがりました。そこには幾百人の土方や工夫が入っていて、昔からの大木
たお いし う くだ あと てつどう し しょうねん ふくろ なか すな
をきり倒し、みごとに石をダイナマイトで打ち砕いて、その後から鉄道を敷いておりました。そこで少年は、袋の中から砂を
と だ し うえ ふ み しろ ひかり こうてつ ま か
取り出して、せっかく敷いたレールの上に振りかけました。すると、見るまに白く光っていた鋼鉄のレールは真っ赤にさびた
み
ように見えたのでありました……。

はんか ざつどう とかい ある はし じどうしゃ あや ころ
またある繁華な雑沓をきわめた都会をケーが歩いていましたときに、むこうから走ってきた自動車が、危うく殺すばかりに
ひとり こぞう かれ ふくろ すな はや しやりん な
一人のでっち小僧をはねとばして、ふりむきもせずゆきすぎようとしてしまったから、彼は袋の砂をつかむが早いか、車輪に投げか
み くるま うんてん と ぐんしゅう ぶれい じどうしゃ なん お
けました。すると見るまに車の運転は止まってしまいました。で、群集は、この無礼な自動車を難なく押さえることができました。

ど ぼく こうじ とお おお にんそく つか あせ なが み
またあるとき、ケーは土木工事をしているそばを通りかかると、多くの人足が疲れて汗を流していました。それを見ると
き どく かれ すな かんとうにん からだ かんとう あいだ ねむけ
気の毒になりましたから、彼は、ごくすこしばかりの砂を監督人の体にまきかけました。と、監督は、たちまちの間に眠気を

もよおし、

やす
「さあ、みんなも、ちっと休むだ。」
かれ ぼうし あたま あ ひ ひかり ね
といて、彼は、そこにある帽子を頭に当てて日の光をさえぎりながら、ぐうぐうと寝こんでしまいました。

きしや きせん の てつこうじょう すな
ケーは、汽車に乗ったり、汽船に乗ったり、また鉄工場にいたりして、この砂をいたるところでまきましたから、とうとう

砂はなくなってしまいました。

と、じいさんのいった言葉を思い出し、少年は、じいさんにあおうと思って、「眠い町」に旅出をしました。

のように張られ、電車は市中を縦横に走っていました。